

## 近況報告書

Beth Israel Medical Center Internal Medicine Intern

伴 浩和

6月末にニューヨークマンハッタンに来て早くも4ヶ月が過ぎようとしております。最初の数ヶ月は私を含めて皆が慌ただしいなか各ローテーションを過ごしておりましたが、さすがに数ヶ月も経つと病棟業務は落ち着きを取り戻しているようです。

そうなってくると、逆に目立ってくるのが私自身の語学の壁です。当初は皆が右も左も分からず、比較的スローペースだったものの、システムに慣れてしまうとこちら研修医たちの仕事は速いです。私自身の仕事のペースが元々遅いということもありますが、それ以上に言語の壁が大きいように感じます。

特に私の場合は外来業務に携わるときにその事が顕著だと思えます。というのも、病棟業務の際は一日中病棟に張り付いているため比較的時間を柔軟に使うことが出来ます。私の場合は、他のインターンよりも1-2時間早く病棟に出向き、朝7時までにカルテとその日の方針をまとめてしまうことで、業務スピードの遅さを補うことが出来ています。

ただこれが、外来業務となると限られた時間内で患者さんをみななければいけないためこのスピードの遅さが顕著になってしまいます。実際は、午前・午後で4-6人程度の患者さんが割り当てられます。日本の外来の比べればなんと楽な業務だと思われるかもしれません。けれど、こちらの外来ケアでは（プリセプターの先生にもよりますが）、来院の主訴に加えて全てのプロブレムに対する評価も求められます。これには、もちろん高血圧・脂質異常症・糖尿病などの慢性疾患のメンテナンス/スクリーニングに加えて、各種予防接種のアップデート、子宮癌・乳がん・大腸がんスクリーニングなどが加わります。もちろんHIVやB型/C型肝炎、喘息/COPDなどその他の基礎疾患がどのように治療され、現段階でどのようにコントロールされているのか、また各専門家にどのような頻度でフォローされているかということも把握しなければいけないため、前日までの段階で過去のカルテや検査データ、アポイントメントの予定をチェックする必要があり予習に時間を要します。当日患者さんを見るまでに、そこまで準備し、カルテにも記載できることは全部記載していざ、と望むのですが、それでも病歴聴取/身体所見/カルテ記載に15-20分、プリセプターへのプレゼンに15-20分となるとどうしても1人あたり30分-1時間近くの時間がかかってしまいます。さらに患者さんは15-30分程遅れて来られることも多く、いつも時間との勝負になってしまいます。

このような、米国留学ならではの苦労を現在経験しておりますが、それ以上にこちらの研修システムにおける恩恵をひしひしと感じています。特に教育という面に関しては、特別な配慮が常にされており、Medical ICUなどでは、朝のベッドサイドの回診に5時間も費やすことがあるほどでした。どのローテーションでも、各症例に対するフィードバックが徹底され、何故そのように考えるのかという思考過程を求められます。回診時に具体的な思考過程を尋ねられたときにうまく答えられず、自分の勉強不足を痛感することも多いです。また、日本との違いに非常に多くのコンサルテーション業務があります。マンパワーが十分であることは訴訟社会を背景にこのような状況になっていると推察されるのですが、専門家からのrecommendationは非常に勉強になる反面、多すぎるコンサルトは時に非効率的であると感ずることも少なくありません。

もちろん苦労もありますが、このような日米の違いや言語環境の違いを楽しみながら、これからの3年間を楽しめればと思います。

P.S. 研修内容とは関係ありませんが、マンハッタンでの暮らしは日本人である私にとって、全く不自由がなく、余暇の時間を妻と一緒に楽しく過ごせるということは意外な発見でした。外国で過ごす、余暇の楽しみも大きな留学の楽しみであると感じております。